

気軽に「イスラム」を体験

増山雄三

「イスラム教」と言えば、中東のイスラム諸国やインドネシアなどでは広く信じられて
いるが、日本人にとっては、いささか馴染の
薄い宗教だが、仏教の寺院やキリスト教の教
会にあたる礼拝堂を、「モスク」という。
これをアラビア語では、「マスジト」とい
うが、それはざ「ひざまずく場所」という意
味で、イスラム帝国がイベリア半島を占領し
ていた時代には「メスキータ」となり、それ
が英語では訛って「モスク」となって、中国
語では「清真寺」と呼んでいる。
日本においては、しばしばそれが「イスラ
ーム寺院」とか「回教寺院」といわれる事が
あるが、モスクの中には一部の例外となるも
のを除いて、崇拜の対象物はなく、あくまで
も、礼拝を行なうための場である。

そして、イスラム諸国の各都市や街区、それに各村々の中心部には、金曜礼拝を行なうための、大きなモスクが置かれ、そこには、専任の導師がいて礼拝を主宰し、エジプトのアズハルの様な大きなモスクには、複合施設を持っていて、学校や病院それに救貧所のよ
うな慈善施設も併設されている。
それで分るように、モスクというのは元々は、政府の布告を通達するための役所であると共に、法廷が開かれる裁判所を兼ねてもいたが、あわせ、イスラム教徒の子弟に読み書きを教える初等学校でもあった。
また、このモスクは現在でも「無料人生相談所」ともいうべき機能を持っており、近隣に住むイスラム法の知識を持った人物が、人生相談をしに来た人に、イスラム法に基づいて、助言や回答を与える場所としても活用されているが、いま、一部のモスクが、イスラム過激派の勧誘に利用されているという。
ここで、モスクの内部と附属設備について

少し触れると、内部は、イスラム教の偶像崇拜排除の教義に従い、神や天使、それに預言者と聖者の偶像や絵は一切なく、装飾は、専ら幾何学模様のようなものだけである。

そして、壁にミフラップという窪みをつくるが、それは、「コーラン」の規定に従い、モスクに集う人々に対し、メッカに向けて礼拝する方向を指し示すという、礼拝の場であるモスクには、必須の設備である。

またその右側には、導師たちが、集団礼拝の際に説教を行なうための、階段状の説教壇があり、その付属設備として、礼拝の前に体を清めるための、ウドゥー（泉）が設けられ手いるが、泉がなければ、シャワールームで代用される事もある。

そして、モスクの建築構造は、回廊に囲まれた、四角形の広い中庭と礼拝堂を持つ形式が基本形で、ダマスカスのウマイヤ・モスクのように、キリスト教の教会の構造を取り入れた、多柱式のモスクが主流だったが、イラ

ンでは、半ドームを多用した形式が始まって、オスマン帝国時代には、大ドームを半ドームで支える柱のない、広大な礼拝堂空間を持つ形式を生み出した。

このように、図像を排し蛇内装と外観を持つモスクは、その装飾美や建築美から、非イスラム教徒にとっても観光施設としての役割を果たし、イスタンブールのスルタンアフメト・モスクやイランのイマーム・モスクなどの、著名なモスクは世界遺産に登録され、世界中から観光客を集めている。

一方、日本におけるモスクといえば、昭和十年（一九三五年）開設の、神戸ムスリムモスクが最古で、昭和五十五年頃まで三か所しかなかったものが、昨年末時点では、三十六都道府県で百五箇所へと増えている。

それは、イランやパキスタンからは労働者が、そしてインドネシアからは、研修生や技能実習生として来日するムスリムの増加を背景に、三大都市圏から各地の県庁所在地へと

広がったので、モスクは礼拝のほか、在日ムスリムの結婚式にも使われている。
 大阪西淀川区、イスラム教徒が集う場所として、シンボルのモスクを中心に、戒律を守る食料品店やレストランが並び、出身国の民俗衣装をまとった人々が行き交い、気軽に異国の雰囲気を経験できる地域がある。
 淀川の少し北にある、阪神電車千船駅の南西約四百米にある、神崎川に架かる橋を渡って暫くいくと、薄緑色の四階建てのモスクである「大阪マスジット」が姿を現すが、マスジットとは、アラビア語で「祈りをささげる場所」という意味で、まあモスクと同じだ。
 四階建ての一階は、イスラム教の戒律に沿った、ハラル食品を販売する店を併設し、ここでは、アルコールを含まない調味料や、戒律に従って調理された牛肉のほか、日本では馴染の薄い生活雑貨も並んでいるが、イスラム教徒でなくても買い物ができる。
 二、四階は礼拝所になっていて、そこは、

男女が一緒に儀式する事のないよう入口が分
れていて、手足や顔を清める泉としての水場
も、男女別に設けられていて、近隣や遠方か
ら礼拝にやってきた信者らが、そのあと買い
物をする場所として賑わっている。
そこは、大阪市内に住むイスラム教徒人口
の増加により、西淀川区の別の場所で礼拝所
を営んでいた信者らが、専門学校だった同区
大和田の四階建ての校舎を取得し、それを改
修して、十年前に大阪マَسジットを開き、日
本有数規模のモスクとなり、コロナ禍前は、
ここへ足を運ぶ観光客も多かった。
パキスタンから六年前に来日し、モスクの
責任者を務めているザハルさんによると、礼
拝に訪れる信者は、同国出身のビジネスマン
や、インドネシア人の留学生が多いが、アフ
リカ系や日本人もいるという。
最も重要とされる、金曜日の昼にある集団
礼拝には、多くの人が集まるが、コロナのた
め、自粛の紙が貼られているが、そんな事が

なければ、大阪マَسジットは、地域の求めに
応じ、近隣の小学生らを招いて、施設の見学
やイスラム教の解説をしているので、ザハル
さんは、「モスクのありのままを是非とも知
って欲しい。いつでも歓迎しております」と
いって、爽やかな笑顔で話す。

ザハルさんが、そんな話をしていると、シ
ステムエンジニアとして働く夫が、東京から
大阪へ転勤したとき、大阪マَسジットの存在
が決め手になり西淀川区に引っ越してきたと
いう、幼い子供を連れ民族衣装の「アバヤ」
を着た、バングラデシユ出身の女性がやって
きて、こんなことを話してくれた。

それは、「知らない土地でも、大阪マَسジ
ットのようなモスクがあると、心が安らぎま
すし、調味料や肉は、この商品しか使えな
いので、大変助かります」と話してくれたの
を聞いて、まさに、ここに作られたモスクの
存在価値を、改めて知ることができた。

令和二年十二月